

マメハモグリバエの発生と見分け方

これまでわが国では北海道と東北地方のマメ科植物の害虫として知られていたマメハモグリバエ *Liriomyza trifolii* が、平成2年秋に静岡県と愛知県の一部地域でガーベラとキクに発生していることがわかった。平成3年には、静岡県では全域

に発生が拡大し、和歌山県、千葉県、東京都及び長崎県の一部でも発生が確認されている。本虫は寄主範囲が広く、農業に対する感受性が低いことから、今後の発生動向が注目されることから、被害の特徴及び本種の見分け方などを紹介する。

寄主植物 キク、ガーベラ、レタス、セロリ、ミツバ、ニンジン、トマト、ナス、ジャガイモ、宿根カスミソウ、メロン、キュウリ、ダイズ、エンドウ、タマネギなどに寄生する。特にキク科、セリ科及びマメ科の植物を好

み、外国では21科120種の植物に寄生することが知られている。

生態及び被害の特徴 卵は葉の内部に産み付けられ、ふ化した幼虫は葉肉を食害し、その食痕が白い線状となって残り、古くなると褐色に変色する。幼虫は老熟すると葉から外に出て、地表面や地中の浅い所で蛹化する。成虫は葉に傷をつけて吸汁するので、白い斑点ができる。このような幼虫と

成虫の食害痕は、花き類では著しく商品価値を低下させる。一世代の期間は15℃で約50日、25℃で約16日で、施設内では周年発生する。

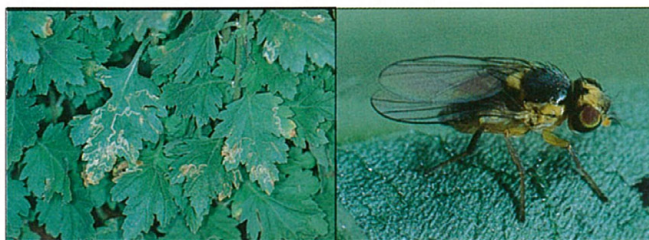
防除対策 成虫は、黄色に強く誘引されるので、黄色の粘着板やリボンを吊るしておく、発生

の無や防除効果が把握できる。また、成虫の侵入を防ぐため、施設の側窓や出入口に寒冷紗を張るなどの対策を講じるとよい。

形態による見分け方

成虫は体長約2mmである。頭部の眼縁はほとんど黄色で、内頭頂剛毛(図1-a)と外頭頂剛毛(図1-b)は、ともに黄色部分から生じる。触角は黄色である。胸背は光沢のない黒灰色で、中剛毛(図2-a)は不規則に2～4列となる。小楯板は黄色で小楯板剛毛は4本である。翅脈は図3のとおりである。脚は腿節が黄色

で、脛節・付節は褐色を帯びる。蛹及び幼虫は1対の後気門(図4-a)をもち、それぞれに3個の後気門瘤(図5-a)を備える。本種は、成虫では近縁のナスハモグリバエ *Liriomyza bryoniae* との識別は困難であるが、ナスハモグリバエの幼虫及び蛹は、後気門瘤の数が7～12個であるが、マメハモグリバエのそれと異なるために、成虫のほかにも幼虫又は蛹が揃えば識別は可能である。



キクの被害状況

マメハモグリバエ成虫

静岡県農業試験場 池田二三高氏提供

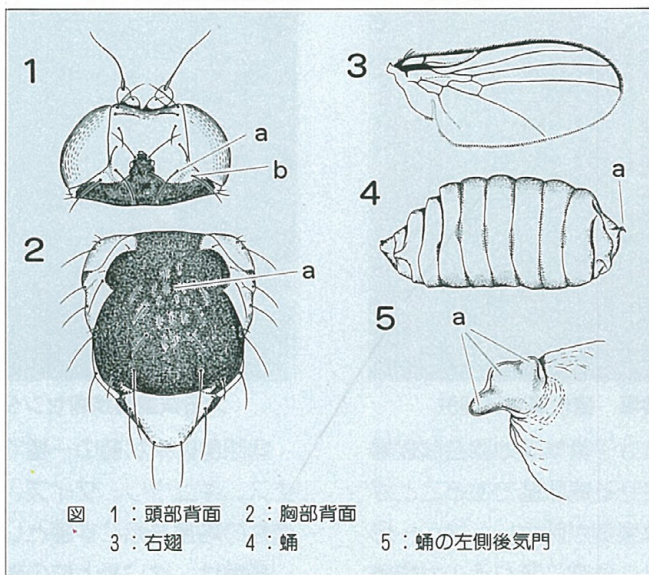


図 1: 頭部背面 2: 胸部背面
3: 右翅 4: 蛹 5: 蛹の左側後気門

マメモグリバエの原図